

# 上杉鷹山とその藩政

安 彦 孝 次 郎

## 一

先づ最初に私は、先人がかつて発表した鷹山論の一端を採りあげて、これを解説・批判することから筆を進めてみようと思う。

第一に挙げたいのは、新渡戸稲造氏が一八八九年アメリカで刊行した英文「武士道」であり、第二は内村鑑三氏が一八九四年に刊行した同じく英文の「代表的日本人」である。

最初に「武士道」について云えば、この書は衆知の通りヒューマニズムの立場から、武士の生活倫理を分析批判したものであつて、刊行後間もなく、ドイツ語フランス語其他多くの外国語に翻訳され、当時献本をうけたアメリカ大統領ルーズベルトが、これを読んで感動し、更に自らこの書を購入して友人に配った程人々に愛読されたものであつた。鷹山に関する記事として、ここに引用するのは第五章の中の一節である。

「フレデリック大帝が『王は国家の第一の召使である』と云いし言を以て自由発達の一新時代が来たと法律学者の評した事は正しい。不思議にもこれと時を同じうして東北日本の僻地に於て、米沢の鷹山は正確に同一の宣言をなし封建制の決して暴虐圧制にあらざる事を示した」（矢内原忠雄訳）

新渡戸氏は、ここに鷹山の名を出してフレデリック大帝と同じような宣言を発表したと記しているが、その宣言の

内容については書いていない。然し、私の見るところでは、それは明らかに天明五年（一七八五）世子治広に藩主の位を譲る時与へたところの「伝国の辞」<sup>（註）</sup>を指すものであつて、それは次のようなものである。

一、国家は先祖より子孫へ伝候国家にして我私すべき物には無之候。

一、人民は国家に属したる人民にして、我私すべき物には無之候。

一、国家人民の為に立てたる君にて君の為に立てたる国家人民は無之候。

天明五年二月七日

治広殿机前

治憲花押

つまり、新渡戸氏としては、当時の封建制下に於ては、支配者がとかく圧制と暴虐に終始したにも拘らず、自ら「召使」の立場に立つて、最悪の種類の専制から人民を救った民主的支配者の実在した事を、この宣言を通して証明しようとしたのであろう。徳川封建時代に於ては、かくの如き種類の支配者は極めて稀ではあつたが、稀とは云へそれが事実である限り、全面的に封建的暴虐と評し去る事の不当を、世界に知らせようとしたわけである。欧米の読者の理解を容易にする為に、同時代のフレデリック大帝を採りあげたのは適切であるが、この宣言はリンカーンの言葉にも相似するものであつて、はじめて読んだ読者の中には、事の意外に驚き改めて封建日本の実体を見直す者も居つたではないかと思う。

尤も、この「伝国の辞」に盛られている心意は、鷹山としてはじめて記したものでなく、それより十八年前彼がはじめて藩主の位に即いた時に詠んだ次の歌の中にもあらはれているのである。

「受けついで国のつかさの身となれば忘るまじきは民の父母」

更にまた、その年、藩祖謙信を祠る春日神社に奉納した次のような誓詞の中にも同じような精神が現はれて居り、要

するに、鷹山の治政上の志向の一貫していることが分るのである。

## 誓 詞

一、文学壁書之通り怠慢なく相努め申すべく候

一、武術同断

一、民の父母之語家督の御歌にも詠候へば此事第一思惟仕るべき事

一、居上驕らざれば即危うからず又恵んで費さずと有之候語日夜相忘れまじく候

一、言行齊はず賞罰正しからず順ならず無礼これなき様慎しみ申すべく候（原漢文）

明和四亥歳八月朔日

上杉弾正大弼藤原治憲

敬 書 花 押

ここに一言附記したい事は、この誓詞は厳秘の中に奉納されたものであって、本人以外何人も知らず、一般に知られたのは奉納後九十九年、鷹山没してより二十七年後であったという事実である。それは慶応元年（一八六五）偶々春日神社が火災に罹った時、社内の神器と共に運び出された箱の中に這入っていたものであり、往年の鷹山の決意がこの時はじめて白日の下に現前したわけである。

以上、私は新渡戸氏の記事を端緒として、鷹山の治政上のモットウを述べて来たのであるが、翻って考へれば、こうした文言は必ずしも珍らしいものでもなく、人は往々自己の反省策励の方便として書き付ける種類のものである。従って私はこれらの文言を以て、直ちに鷹山の治政の実蹟を示すものであるとは云い得ないのである。即ち上記した伝国の辞や和歌や誓詞が単なるモットウに終ったものであるか、換言すれば、これが美しい抽象的文辞に過ぎなかつ

たか、又は彼の志向を真に表現したものであったかは、彼の生涯に亘る実践的行為との比較検討によってのみ決せらるる問題である。この意味に於て私は、次にその旨の史実を惹出し、それらの連関を吟味する義務を感ずるのである。

(註) この「伝国の辞」は治広が位を齊定に譲る時にも授受したものであり其後米沢藩主襲封の際の慣例となった。

## 二

鷹山は宝暦元年（一七五一）高鍋藩主秋月種美の次男として江戸に生れた。十才の時米沢藩主上杉重定の養子となり十七才で藩主の位を継いだ。上杉藩は当時十五万石であった。藩祖謙信が、その昔、北陸に勢威を振っていた時代には数百万石であったが、二代景勝が会津に移つて百二十万石、その後関ヶ原役に豊臣方に組したかどで米沢に移されて三十万石、五代綱憲が、養子であるという理由で半減されて十五万石となり、其儘重定の代まで続いていたのである。

藩主となった彼は、其儘江戸邸に住んでいたが、其後三年目で始めて藩国米沢を見る事になった。従来、米沢藩に於ては、藩主の初入国の時はお祝として、家中の武士に酒肴を出すのを慣例としていたのであるが、この場合、足輕小者等は除外されていた。ところが鷹山は、その階級差を外して広く足輕小者等にも酒肴を与へ、その上直接詞をかけようとしたのである。

封建的分階が最も厳しく旧慣格式の極度に重視された時代である。武士、農民、町人等の階級差は勿論のこと、同じ武士間に於ても、その内部は幾多の階層に細分され、細分された各階層は、それぞれの家格に従つてきびしくその処遇が決められていたのである。

米沢藩も勿論この例外ではなかった。果然、彼のこの申出は、旧慣に反し特に「家格を輕くする」という理由で、養父及重臣より強い反対を受けたのである。然し、彼は養父に向つては、「自分は他家より入つてこの家を相続した

ものであるから、とりわけ家臣と親しむ必要がある、どうか私一代だけは御許し願いたい」と頼み、又重臣に対しては、天下に大事が起って戦が始まったような場合、これは軽い身分の者だからと云って、命令を差控へる様では勝利を得ることが出来ないではないか、と説いた。これには養父も重臣もかぶとを脱ぎ、遂に彼は所信を貫き得たのである。彼の持っている民主的精神の萌芽が、現ははじめたと評すべきであろう。

ところが其後間もなく、彼は一大事件に当面する事になった。それは藩内武士の斗争の問題であった。従来米沢藩内には、上杉家諸代の家臣を以て結ぶ「馬廻組」と、上杉景勝の実家である長尾家の武功者の末孫を以て結ばれた「五十騎組」という二つの侍組があった。何れも優劣のない家柄であつて、藩主の初入国の折には、鉄砲打の儀式があり、何れの組が先番になるかが、その都度争いの原因になっていたのである。各々頑強なる武士であつて、夫々家筋を主張して譲らず、その氣勢は例へば仇敵の如く、親友も絶交し親戚も会合をやめ、さては夫婦の別離も起る有様であつた。この時に當つて若しその順位を強権によつて決めるような事をすれば、不意の斬り合いもはじまるであろうし、或は挙つて藩籍を脱するという危機に面するかも知れず、家中の人心胸々として実に不穩の氣に満ちてゐた。重臣も此問題については、どうにも手の下しようがなく、遂に若き藩主にその解決を委ねたのである。襲封早々の鷹山としては、かくの如き慣例もその経緯も全く知らなかった。事情をきけば双方に理屈がある。既に永年に亘つて争つて来た問題だ。解決は頗る困難だが、然し荏苒日を待つ事は出来ない。己むなく彼はその解決の衝に當る事にした。彼は先づ両組の代表者を招ぎ、自分の考を述べた。即ち彼は、先づ両組を左右の手に譬へ、何れを先勤にすべきか思慮定らずと云い、若し争いが高じて一国の騒動にも及んで將軍の下知等が下るようになれば、当然に国が亡びるわけで、その際何れの国で先勤を争うのであるか、と問い「四十余年静まりたる儀を起し年若なる手前に片付け候へとは当惑の事に候」と卒直に心状を披瀝し、それについて自分は小藩からの養子であるから藩国に万一のことがあ

つても諦めがつくが、譜代の家臣である諸士はどうするのかと云い、木曾山の檜は共に摺れ合つて火を生じ、一山を焼き倒すときいている、この争いはそれと同じではないかと懇々と論じたのである。これを聞いた彼等武弁も、流石に藩主の誠意に打たれたが、然し争いの源は複雑で、依然として感情の相剋が深く、容易に妥協は出来なかった。ここに於て執政は、この直覧の軍典を廃止するよう提案したのである。然し鷹山はこれを採用せず、二ヶ月後改めて両組の代表を召集して最後の頼みをした。藩主の座から降りて家臣に頭を下げたのである。ここに於て彼等は深い感動に打たれ、先づ五十騎組が、これほどまでに主君の心を悩ますのは忍びないと云つて、先勤は馬廻組に譲る旨を申し出た。ところが馬廻組も事の一切を知つて感動し、先勤は五十騎組に願ひ永く上覧を続けて貰いたいと申し出たのである。

これを聞いて鷹山ははじめて安堵し、結局五十騎組先勤と裁決した。ここに於て藩運を堵した争いが解決したのである。時に彼の年齢僅かに十九才、執政その他の老練政治家の如何ともなし得なかった紛糾を見事に収めたのである。凡そ為政者としての最大の関心事は如何にして人事の融和を図るかという点に存する。人の和なくして良知は求められず、従つて善政は起り得ない。而して、人の和は一時的の迎合や形式だけの妥協によつて得られるものではなく、衷心より湧き上る人間的共感に待つ以外にその方法はない。そうした結果をみるのは、結局のところ統率者の人格如何に懸るものであつて、その型はいろいろあるにしても、要するに公明、無私、寛恕の精神に帰着するのである。若き鷹山に、それらが悉く備つていたというのは、彼を誇張するものであろう。事実、解決に當つて当惑する気持などは、その若さと弱さを示すものであるが、然し自らの弱さを卒直に表明して共に藩国衰亡を避けようと願うその誠実さに至つては、まさにヒューマニズムの本道を歩むものと評しても過褒ではないであらう。

### 三

当時の米沢藩は窮乏のどん底にあった。富商よりの借財は無論のこと、農民への苛税、家臣よりの知行借上等によって、辛じて日々を彌縫しつづけている有様であった。この実情をみた鷹山は、襲封と同時に画期的な儉約令を發布し、自らこれを実践しはじめた。有名なる一汁一菜綿服不断着用はその一例である。然し乍ら、革新はいつの時代でも歓迎されないものである。況んや当時一般からみれば、内容の如何を問はず、それが単に「新らしい」というだけで不当なものと決められた。家臣の多くは面従腹背、重臣の中には公然絹布を着け若き藩主を目して「小家よりの養子」と冷笑嘲罵する者さへ居た。

安永四年（一七七五）彼が三度目の帰国の時だった。江戸を発してより十日目、城下も程なく迫り行列が城外にある山上大橋に差ししかろうとした際、彼は突然馬から下りた。橋はさきに洪水の為破損し、家臣の手伝で漸く修理が終ったばかりであった。下馬した彼は、橋畔に居並ぶ家臣に向って「手伝過分に存ずる」と言葉をかけ、その後徒歩で橋を渡った。これを見た左右の供奉は大いに驚き乗馬を切願したが、これに対し、「侍の手で作られた橋を馬足に渡することは出来ぬ」と云った。後に続いた江戸家老は、主君の所作を顧みもせず馬上の儘傲然と橋を渡った。当時は大儉約励行中であり鷹山の着服は木綿であったが、家老の羽織は黒縮緬であった。――

この事実は固より挿話以上のものではないであろう。然し、藩主としての階級的威厳に拘泥しない彼の民主的性格が小気味よく表出されている点に於て、一応記しておく価値があるように思はれる。

更にもう一つ、私は彼の政治的志向を現はす事実を記しておかなければならない。それは、同じく安政四年六月の出来事である。江戸家老を中心とする藩内の保守派の重臣七名が結謀して、鷹山に面接し、新政の撤回と革新派の追放を強要する弾劾書を提出したのである。それは要するに鷹山の治政を誹謗し彼によって登用された側臣を奸佞の徒

輩と断じ、直ちに之を罷免せよという要求であつた。藩史では之を「七家の乱」と称しているが、如何に年少とは云へ封建制下の藩主に対しかくの如き強要を為すというが如きは、前古未曾有と称していいであらう。私は今その実状を詳しく記す暇はないが、この事件の解決に當って採つた鷹山の方法と態度だけは省くわけには行かない。即ちそれは彼の政治的志向の最もよく表出されたものの一つだからである。この強要の事実の報告をうけた養父重定は、その不当を怒り直ちに彼等に成敗を加へようとした。然し、この時鷹山は強いてこれをとどめ、先づ使を七名の私宅に遣はして和衷出仕をすすめると共に、自らは藩祖謙信を祠る春日神社に参籠し、夜を徹して君臣和合の祈願をつづけた。然し、何れも効果はなかつた。

その間城下領内の民心は騒然となり、漸くにして藩国存亡の危機さへも感ぜられるようになった。かくて鷹山は数日後行政監察の職にある大目付等を召集して、七名連署の弾劾書を示し、事実の有無を質した。この場合、革新派によつて推挙された者を意識的に除外した。大目付等の答は「否」であつた。然し彼はこれで満足せず更に末端の行政を司る多くの役職を集めて質した。その答も異口同音に「否」であつた。つまり弾劾書に記されている事實は、証人によつて悉く虚構のものと決つたのである。事の理非曲直は判明した。彼は城内外の警備の中で七名を呼び出し、首謀者二名は切腹、其他は情状によつて隠居、閉門、知行召上等の判決を下した。

以上によつて、彼が不法なる陰謀者を裁断するに當つて、如何に慎重なる手続を採つたかがわかるであらう。使を派して再考を求め、神に祈つて和衷を図ろうと努める如きは、当時の封建藩主としては夢想だになし得ぬ仕方である。自らの判断に誤りのあるのを虞れ数多くの証人を集め、その中から特に親近者を除くという処置などは、まさに近代裁判の手続に類するものである。彼のこうした態度をみて民主主義的と評するにおそらく何人も異議はないであらう。これを赤穂事件（元禄十五年、一七〇二）の際浅野長矩を何等調べもしないで、その日の中に断罪に処した將軍綱



吉に比べてみれば、その間の消息が更にはっきりと了解されるであろう。

凡そ、民主政治は人材登用を以てはじまるのが常道であり、各々能力に応じてその処を得せしめるというのが民主主義の目標であるが、封建的階級意識はこれを極度に嫌悪し、敢て行へば「祖法」に背き「家格」を無視する反逆者と見做された。従つて卓抜なる識見と不撓の勇氣なくしてはこうした実行は出来なかつたのである。然し鷹山は、これをやり遂げる性格を持っていた。襲封と同時に信ずる者を筆頭重役の執政に登用し、小禄の士を近習頭に抜擢したのは即その一例であるが、其後一小士を水利土木事業の主役に登用したるが如きは特記すべき英断であつた。

当時、藩領内の田畑は荒れるに委され、年々の収獲は激減の一途を辿っていた。藩経済復興を念願としていた彼としては、国より黙過出来る筈はなく、自ら「籍田の礼」<sup>(註)</sup>を行つて惰農を指導すると共に、水利の不便な地方に堰を掘

つて良田を作る方法を考へていた。然し、この水利作業は頗る困難であつて、従来屢々試みられたが一つとして、成功した例がなかつた。鷹山はその理由を人を得ない為とし、数理に堪能なる一家臣を選んで一切を彼に委任したのである。その家臣は一見して愚鈍の如く言動に常軌を逸する事が多かつたので、この人事は重臣より強い反対を受けたが、鷹山は見るところありと云つて動かなかつた。主君の信任に感激したその家臣は、寢食を忘れて智脳を絞り、六年後延長十一里に亘る難工事を完成したのである。これによって恵沢を受けた土地は三十三ヶ村に及び、今日でも尚肥沃の良田であることに変わりはない。当時としては驚嘆に値する土木工学の成功であつた。私が曾て鷹山の遺跡を訪した時、この堰のほとりにただずみ、偶々傍の一老農と語つた事があつたが、今尚耳に残っているのは「黒井様のことで来られたのか」と云つたその言葉である。黒井というのはその家臣の姓であり、(黒井半四郎忠寄と云つた)現在に至る迄村民は彼を恩人として敬称を附し、その水路を「黒井堰」と名付けている。鷹山の人材登用による善政が、今尚響きを伝へている一例である。

保守陰謀の一派が処断されてから革新政治は漸く軌道に乗り出したが、藩財政の窮迫は依然として続き、農民への苛税と家臣知行借上はいつ終るとも見えなかった。これを憂へた鷹山は決するところあり、今まで厳秘に付されていた藩財政の内容を公開することにしたのである。安永四年（一七七五）のことである。

さて、封建制の特徴の一つは秘密主義という事である。法律さへその職にある者以外は絶対に之を知る事が出来なかった。況んや財政をやである。即ち、各藩共其財政収支の明細は堅く秘密を守られ、一切他に知らせなかった。従つて藩祿の名目高と実収高とに開きがあつても、何人もその実状を知る事が出来なかったのである。米沢藩もこの例に洩れず、鷹山の代に至るまで、職に当る者以外は何人もその内状を知る由もなかった。財政の公開はこの秘密主義を打破する画期的な英断であつた。窮迫の実状が判明すれば人民も心からなる協力を惜しまないであろう。彼の念願はまさにその点にあつた。家老の名によつて諭達された文書の片言をみても彼の気持ちが分るようである。

「御家中に於て十五万石出入の実否を存ぜず候ては自ら御国の盛衰の事も知られまじく候。…さり乍ら前々秘し置かれ御取箇帳に候へば存ぜざるもことわりにて余儀も無之候。…此段披見に入れ候て、年来の取行いあからさまに申聞かせ候様にて仰出され候、依之御取箇帳一冊づつ御渡し候間頭々ゆるゆく披見の上始終の儀相心得組中支配下へ追々申聞けらるべく候」

今日で云へば「財政白書」というところであるが、年貢収支を記した「御取箇帳」を一冊づつ渡すからよく「披見の上」実状を知ってくれと云うのである。一般領民としてはこれによつて自分等の納入する貢租の費途を知り、間接ながらも藩財政批判の機会を持ち得たのである。封建制下に於ては未曾有の民主的処置と云はなければならぬ。果然こうした処置は民心を明るくし、其後実施した産業開発に対しては、領内を挙げて協力するのを惜しまなかった。一例を云へば、植樹の実施である。詳しく云へば漆、桑、楮各々百万本づつを武士、町家の屋敷、寺院神社の境内、百姓の持地等へ植えたのである。漆からは塗料用の漆と蠟を採る事が出来る。楮は和紙、桑は云うまでもなく生糸生産

の原料である。財政の窮乏を回復する為には産業を興す以外に道はない。然し、その企画実行は容易な事ではなく、領民の理解なくしては成果を挙げる事は出来ぬ。御取箇帳の公開はその下地をつくったのである。然し、この企画を実行するに当って最初に直面した困難は、苗木購入費の欠乏であった。藩庫は固渇してそれを支出する事は出来ない。これを見た鷹山は自分の仕切料（俸給）から年々五十両を削ってその資に当てさせた。

彼の仕切料は年二百九両であった。その中から十数年に亘って年々五十両を割こうと云うのだ。当時、米沢藩では藩主の仕切料は千五百両と決っていたが、彼は襲封当時藩の窮乏をみてこれを辞退し、世子時代の二百九両にとどめさしていたのである。これらの植樹が、後年財政回復の為の重要な資源となった事は云うまでもない。今日みるところの米沢地方における絹織物工業の繁栄は、まさにこの桑樹に源を持つものであり、要するに彼の民主的治政の成果に外ならないのである。

（註） 安永元年（一七七二）三月、鷹山は遠山村に於て農田開墾の儀式を行った。それは開墾地に立って彼自ら鋤を採って三度土を返し次に執政はその三倍の九揆、郷村次頭取及郡奉行はその三倍の二十七揆、代官以下はそれぞれその三倍だけの鋤を入れた。これを籍田の礼と云うのである。現在、その地に行ってみるとこの儀式の行はれたところに「鷹山公籍田の碑」が立っている。

#### 四

以上私は、新渡戸氏の採り上げた鷹山の「宣言」の内容を解説して、それが彼の政治的実績と如何に関連しているかを見て来たが、次にそうした政治的行為の基盤をなしている彼の人間性そのものを考察する順序となった。そこで私は、本文の冒頭に記した内村鑑三氏の著書「代表的日本人」を採り上げて、これを緒として筆を進めて行こうと思う。

この著書が刊行された一八九四年には「日本及日本人」(Japan and Japanese) という書名であったが、一九〇七年に再刊された時「代表的日本人」(Representative Men of Japan) と変へられたのである。

内村氏は改めて述べるまでもなく、士人的気魂を深く蔵していたところの基督教信者であつて、操守の堅確、識見の高邁を以て内外に聞えた人物であつた。

この書に於て彼は、我国の代表的人物として日蓮、中江藤樹、上杉鷹山、二宮尊徳、西郷隆盛の五人を挙げているが、改版当時の彼の日記をみると次のような事が書かれている。

「英文代表的日本人改版の校正をなしつつある。今日上杉鷹山の分を終り二宮尊徳の分をはじめた。今より二十八年前にこの著を為しおいた事を神に感謝する。真の日本人は実に偉い者であつた。今の基督教の教師神学士と雖も遠く彼等に及ばない。米国宣教師等に偶像信者と呼ぶることも鷹山や尊徳のような人物に成るを得ば沢山である。余は或時基督教信者をやめて純日本人たらんと欲する事がある」(鈴木俊郎訳)

彼が、如何に鷹山の人間性に傾倒していたかの一端がこの日記の中に現はれているわけである。この書は改版後、間もなくドイツ語とデンマーク語に翻訳されたが、これを読んだ西洋人の中に、フランスのソルボンヌ大学総長アペルとクレマンソーの二人がいた。「自分の書いたものをクレマンソーが読んでくれたとは嬉しい」と彼は日記に書いている。而らば彼は、この書に於て鷹山を如何に見たであろうか。それは次の一節をみればその一端に触れる事が出来よう。

「あらゆる人間の中でおそらく鷹山は欠点や弱さを数へあげらるる必要の最も少い人であろう。彼は如何なる伝記者も多分意識し得ない程、自分の欠点や弱さを意識していたからである。鷹山は人と云う言葉の完全な意味で人であつた。弱き人であつたればこそ責任の地位に就くに際し神社に誓詞を奉納するのである。彼と彼の藩に危機の迫つた時彼を鎮守の神に追いやったもの

は（そう云つて差支へなければ）彼の弱さであった」（同上）

氏は、鷹山を評して直ちにその「弱さ」を指摘したのは鋭い見方である。ところで、この弱さは氏自身充分意識しているように強さに敗ける弱さではないが、鷹山の青年時代をみるとこうした弱さが数々目につくのである。例へば儉約令発布後周辺の反対に苦慮する気持（後段参照）、或は、初入国の折、藩内武士組間の斗争の解決を迫られて「年若なる手前に片付け候へとは当惑の事に候」と嘆息する心情、或は「七家の乱」に際して独り城中にて思案に暮れていた深夜、唯一の味方なる執政と近習頭の来訪をうけ「汝等を待つこと久し」と云つて涙を流した姿などをみれば、まさに彼の人間的弱さを認めざるを得ないのである。これは敏感なる者には往々にして見られる性状であるが、「歴史学」はかかる人間の一面のみを強調して結論を急ぐ事を許さない。この弱さは其後如何に変化していったか、如何なる実践に移行して行つたかの推移を検討する事を要求するのである。生涯に亘る彼の行動を精査してみると、彼はこの弱さに徹していたとも云へるのである。

彼は、藩祖謙信のように天馬空を馳けるにも比すべき颯爽たる英雄ではなかった。むしろこれとは反対に、我身を隠して大地の悩みを払拭しようとする質実謙虚なるヒューマニストであつたと言へる。彼の弱さも畢竟こうした性格の一面に外ならないのである。

さて彼の人間性を探求するには、先づ彼の家庭と環境とを採りあげるのが適切かと思う。そこにこそ人間の偽りのない心状が反映しているものだからである。彼は襲封後三年目十九才の時、重定の息女幸姫と結婚した。ところが彼女は生来知能低弱であつて、而もカリエスを病む不具者であつた。然し彼は、その哀れなる配偶者を慰め、小児をいたわるが如く日々雛遊びの相手になつていた。これを見た側近の女中達は、若き藩主の心情を察して涙のかわく暇もなかったと云はれている。彼女は三十才にして世を去つたが、その間十余年、彼は江戸にあつて終始孤独を守つた。

養父重定は早くより国元に帰って居り、この事については殆ど知るところがなかった。彼は衆に口止めをして絶対に養父に知らせなかった。悩みを自分一人の胸に収めて家庭一族の悲劇を救おうと考へていたのであろう。幸姫の死後、彼女の遺品として生前の着衣が実父の許に送られて来たが、それは小児の着物と殆ど違いがなかった。重定はじめて実情を知って大いに驚き、かような不具の女を連れ添はせた事は、わが一生の過ちであると云って、今更に養子の可憐さとその誠操とに慟哭したと云はれている。

鷹山は不幸だった。既に述べたように、襲封早々老臣の反対を受けて心の安まることもなく、又内にあつては不具の配偶を相手として愉しかるべき青春の第一歩は無惨にも踏みにじられたのである。結婚の翌年、彼は国元に於て同族の女を迎へて側室とした。固よりこれは彼自身の意向によつたものではなく、正室の不具を知っていた侍臣の特別の配慮の結果であつた。当時の大名は、江戸に於ても正室の外に数多くの側室を設けて、華奢遊樂の中に日を送つていたのであつて、国元に一側室を設けるなどはむしろ珍らしいことであつた。而もこの側室は年齢三十、彼より十年の年長であり、結婚の遅れたのは、彼女に必ずしも好条件のなかつた事を意味するのである。然し、彼女は性質賢明貞順よく鷹山に仕へた。其後彼女の間に顕孝という男子が生れたが十九才で早世し、其後実子を持たなかつた。

彼が襲封と同時に儉約令を布告し自ら率先して之を励行したことは既に述べたが、彼としては国元の家臣一般が儉約令に服さない事実を知つて苦慮し、ある一日、その師細井平洲に向つて是非を質すのである。平洲はこれに答へて「下々の事は先づ御頓着遊ばされず御一人の御手前のみ御守り遊ばさるべく候」と諭したのであるが、鷹山の儉約の真意は七老臣の嘲笑したように、小事に拘泥したのではなく「綿衣にても着し朝夕の食味とても減じ候て下々と共に難渋を致そう」とする意向の現はれに外ならなかつたのである。これを、同じく儉約令を發布して苛酷な取締りを強行した水野忠邦と比べてみれば、鷹山の人柄の特徴がはっきり浮び上つて来るであらう。ヒューマニストは、一見す

れば弱い感じだが、その中には人心を察知する敏感と、風雪に耐える持続性とが潜んでいる。

鷹山の真意も、この意味に於て歲月と共に次第に地下に滲透して行つた。（水野忠邦の強硬政策が行詰りその失脚を早めたのと対照的である）佐藤信淵（一七六九—一八五〇）が「經濟要録」に於て彼について書いてある一節は、こうした消息を知るに適当な絆となるであらう。

「余が米沢に遊びし時に、ひそかに民談をききしに近頃老侯に、近侍する老士あり、一豪家に來りて浴せし事ありしに、古き紅色木綿の襦衣を脱ぎて机上に置き浴後に恭しくこれを着たり。主人怪みて故を問う、老士對へて曰くこれを隠居君の御襦衣なりしが、紅きものは老人に宜しと仰せられて我に賜りし所なりと、亭主はこれを聞きて乃ち着たる小袖を脱ぎて木綿布子に着換へ、老士に謝して曰く、国君の尊きを以て儉素を修め給うこと此の如き乎とて感泣数刻に及べり、時にこの豪家の女子を人に嫁せしむとて、数多の美服を支度せしを皆悉く之を止めて木綿の振袖にて遣はしけるとぞ」

即ちこの記事は、鷹山の表裏のない儉約の続行が、十数年の後、偶然の機会からはじめて領民にわかり、これを契機として法令の効果を挙げるに至つたという事実を示したものである。

「米沢の境内は士族皆能くその業を励み風俗の他邦に勝れて美なる者はその治憲君の遺徳なり」

と書いているが、こうした挿話をその著述の中に記したのは、信淵自身鷹山の人間性に深い感動を持ったためであろうと思う。事実、信淵は秋田の生れであつて、他国の藩主を殊更ひいき目で見ると義理もなかったであらうし、又諸国を巡歴し乍ら各藩の実情を比較觀察していた学者であつたから、ありふれた逸話や平凡なる善行などに動かされる筈がないからである。

要するに、この挿話は鷹山の人間性の特質を示すものであつて、豪毅果斷の強さと質実謙虛の弱さとが治世上如何なる効果をかもし出すかを考へさせる一例であらう。平洲の云つた「御一人の御手前のみお守り遊ばさるべく、物事

は急に参らざる者に候へば、ゆるゆる御移し換へ遊ばさるべく候」という言葉が其儘事実となって現はれて来たのである。

## 五

天明五年（一七八五）彼は三十五才で藩主の地位を義弟治広に譲った。その理由を、彼は幕府よりの普請手伝の重複を避ける為と云ったが、真の動機は、養父の生存中にその実子を藩主の位につけ、養父を悦ばせようという配慮にあった事は疑いを入れない。人心を察知する敏感と、権勢欲のないその無私性が、彼をしてこの態度をとらせた根本原因である。

当时に於ける大名の隠居の中には、完全に政治から離れていわゆる楽隠居をする者と、表面は隠居し乍ら其後も政治を総攬するものとの二つがあったが、鷹山は後者であった。彼としては、既に讓位した限りは敢て藩政に関与する積りはなかった。然し次代治広は、大小となく政務の指導を彼に仰ぎ、養父もまた彼なくしては衰頽に喘ぐ藩国の立つべき目当なし、と云って彼の後見を要望した。鷹山はその請を容れ生を終るまで藩政をみたのである。

当时は、鷹山も藩政に熟達し、賢君の名声が漸く高まっていた。一例を云へば、白河藩主松平定信は、早くより鷹山の人間と治政に対して深い尊敬の念を抱いていたのであるが、それは、鷹山が帰国に際して白河に一泊した折、定信がわざわざ使を派して彼の旅宿を訪ねさせた事をみてもわかるのである。

「常々御美名相慕い謁見を願居候処、図らず御讓封御帰国の由、御縁の薄き志願空しく誠に一生の残念に御座候。此上は能く御自愛被成候様奉存候」

これがこの時使者の伝へた口上である。白河藩も定信の治政宜しきを得て善政の聞え高かったが、天明三年（一七八三）の凶荒に際しては、遺憾ながら餓死者を出したのである。定信は数年後老中の職に就いた時、全国の諸藩に向



って、粃一万石につき年々五十石を五ヶ年に亘って貯へる事を命じたのは、その領内に一人の餓死者も出さなかった鷹山の凶荒対策を見ならったものであった。鷹山は当時早くより凶作の起るべきを予知し、九年前より村々に粃を貯蔵する郷倉を建てていたのであるが、領民が愈々餓死に迫られた時、彼は躊躇する事なく郷倉を開放し、男子は米三合、女子は二合五勺、味噌一人十匁づつを給与した。他藩に見る事を得ない救急策であったのである。

鷹山の治政は次第に軌道に乗り、その業績は諸藩の注目するところとなったが、幕府よりの普請御手伝の負担が重って、財政の窮迫は依然として彼の心を悩ました。

そこで、寛政元年（一七八八）に「四民節約令」と称する一大節約令を發布したのである。それは、武士の刀の飾りや婦女の櫛帽子等の使用を禁じ、家作普請を止める等、微に入り細をうがつ節約条項を以て満たされて居り、往年襲封時の節約令とは比較にならないほど厳しいものであった。更に当時と異なるのは、鷹山自身の心構へであった。彼は最早周辺の意図は顧慮しなかった。顧慮したのは、この節約令によって生ずる事あるべき下民の所得減少の問題であった。事実、この布告は家中の上級武士、富裕なる商家豪農を目標としたものであった。即ち鷹山は当時小身者一般が節約すべき何等の余裕も持たなかった事を知っていたのである。

後年これに関して出した「節約商議之規則」をみれば彼の関心の重点が明らかにわかる。即ちこの商議の主眼とするところは、「上に向って用を省き事を約かにすべく、下に臨んで利を争い法を煩はしくすべからず」との原則にあるのであって、節約による下民の所得減少を彼は最も憂へていたのである。この原則こそ「節約の要なり」と称し、更に具体的に例示して「年中用向申付候者へは」たとえ、節約令の下に於ても年の暮の賞与手当を減じてはならぬ、用向を省いても賞与には及ばぬ様にすべき旨を云っているところを見ると、彼は、己に節約の必要は上層階級にあるのであって下民大衆にあらずとする社会的現実を認識していたものと考へざるを得ない。

彼の社会的関心は更に進み「遊女禁止令」となって現はれた、(寛政六年一七九二)。彼は、江戸家老が、遊女禁止による他の社会悪の発生を主張して反対したにも拘らず、決然としてこれを断行した。禁止の処置は執政蒞戸善政の発意からであり、江戸家老の反対以外、藩儒の有力なる否定的勧告もあつたが、彼は動かなかった。果して其後何等社会悪の発生もなかった。

彼には最早青年時代の懐疑性はなかった。それは、既に儒教によるヒューマニズムの信念にまで止揚されていたのである。

封建時代に於て最も目立つ民間の習俗は、疾病療法に関する迷信である。かつて、彼が二十五才を迎へようとする前年の暮、厄年祝を企画した側臣に向つて「生の長短は命なり、何ぞ其年にして吉凶あらんや、よし吉凶ありと雖も是又如何にせん。一笑に余りし事なり」と書いてこれを取り止めさせた事があつたが、かような迷信否定にあらはれた科学的精神は、寛政五年(一七九〇) 医学校(好尚堂と命名)の建設となつて具現した。はじめは、本草学者を江戸より招いて領内の医者に学ばせたが、後日、優秀なる者を選抜して江戸へ送り、杉田玄白に就いて西洋医学を学習させたのである。当時世人は、玄白を評して夷狄の法を用いる邪道の者とし、恐怖と猜疑の眼で見ているにも拘らず、彼は蘭学を「窮理の学」と云つてこれを称へ、それへの出費を惜まなかった。即ち彼は自らの仕切料を削つて医療器具を購入せしめたのである。彼は、儒教によつて教育されたが、それによつて受けた教養は、儒教を超へて西洋科学への理解にまで高まつた。これによつて蒙つた領民の福祉については改めて述べる要はないであらう。

## 六

さて最後に私は、彼が老年における近親者への関心の模様を語りたいと思う。それは彼の人間性の機微を知るに格

好な方法ではないか、と思うからである。

彼の隠居後、位を襲いだのは義弟治広であつたが、治広の息女が次々に嫁入りする事になった。第一女はい、い、こに当る世子斉定へ、三女は因州池田藩主へ、四女は小禄の武士、六女も格下の家に嫁するのであるが、各々の嫁入り前に鷹山は彼女等にはなむけの手紙を書いている。私にとって興味あるのは、その手紙の内容が相手の家格によってよくその特徴を見分け、それが各々の幸福の源であるという所以を、世俗人情から綿々と説ききかせている点である。

第一女の相手はい、い、こである。この場合、彼は親近の者へ嫁する事の気樂さを説き「他門」に入る時は「家風も熟知せず、見ず知らずの人を舅、姑、夫、親戚とする事なれば之に事へてその心に叶はん事」は容易でないのに「御身の事は如何なる果報にや……上もなき幸福にて何の心か勞し何の身か苦しかるべき」とその仕合せを極力云いきかせているのであるが、こんどは大藩池田家に嫁ぐ三女に対しては「お身は姉妹にも超へて大国の君夫人と成り給う事如何なる果福に候や」と書いている。池田家は因州の大藩である。若し第一女に向つて述べた幸福觀から云へば「他門」に入る事は苦勞が多く、必ずしも仕合せとは云へない筈なのに、彼は「姉妹にも超へ給う果福なり」と書いたのである。

凡そ幸福とは主觀的意識であつて客觀的存在ではない。如何なる境遇、運命の中に於ても幸福を作り得るわけで、問題は、あるものでなくつく、い、くるものであるという自覺である。鷹山はそうした幸福をつくる方法を教示したのであつた。

第四女が小禄の武士に嫁する時与へた手紙をみればこの点が更に明になるであらう。

「大家大禄の夫人と云はるるは、おのづから家格も重く重ければ出入も難く、小家小禄の奥方の上は家格も軽くされば御身の事は必ず桜田へ参らるる事も姉達よりは屢々にて両家への親しみも深かるべし」

桜田とは江戸における上杉邸の通称であるが、実家に気軽に出入出来るという事は福達よりも幸福ではないか、と教へていたのである。

以上引用した彼の手紙の文句は、考へれば極めて常識的な教へであるが、然し自ら筆をとって、綿々懇々と理を尽し情をこめて、年若い女性の心を生かそうとするその愛情と慧知だけは看逃してはならないと思う。

ところが、この同じ人間が一度自らの問題になると、秋霜にも似た厳しさを以て自己に相對するのである。それは、彼の六十九才の時であつた。当時の藩主斉定が、鷹山の仕切料が、依然として世子時代の二百九両にとどまつてゐるのを氣にして、その増額を側臣と図り内定したのであるが、これをきいた鷹山は、自ら書面を認めてこれを辞退した。その大意は、仕切料の増加ともなれば自然心もゆるんで我儘の心も起り修業に障害を来すからこの儘にそつとしておいて貰い度い、と云うのであり「心の欲する所に従へども矩をこえずとは元より聖徳の事、凡下浅劣の身は何とて企て及び可申哉、唯仕切等不足にて欲すべき様なきが凡下の我輩今日の嚴師友と頼み申す事に候」と書いている。即ち彼によれば不足勝なる日常こそ我身の師友であつたのである。曾て少年の時神社に納めた「誓詞」の中の「恵んで費さず」という決意が晩年に至る迄変らなかつたのである。その後三年、文政五年（一八二二）三月彼は七十二才でその生涯を閉ぢた。

## 七

以上数項に亘つて、私は鷹山の行つた藩政の実績と、その人間性について述べて来たが、要するに彼の治政の根本は民主的精神であり、この精神を醸成したものは彼の人間性そのものと云つていいであらう。

唯ここで考へなければならぬのは、彼はなるほど民主的精神を以て封建的諸旧制の改革に努力したが、それは政治の具体的運用の面であつて、封建制そのものの基本的改革ではなかつたという事である。彼には後年の西南雄藩の

ように、徳川封建制を打破しようとする革命的意思の持ち合せはなかった。従って彼の革新的政治も、結果からみれば、徳川封建制維持の努力に外ならず、この意味に於て、吉宗、定信と共に、復古主義者と看做されても己むを得ないであらう。

然し乍ら、封建的専制の横行していたその時代に、自ら率先して領民と苦難を共にし、私を捨てて藩国の窮乏と衰頹とを救ったこの儒教的ヒューマニストの行績こそは、永く史上に記録されて然るべきものであらう。

(附記) 本文はかつて発表した小稿「徳川封建制下の民主的藩政家」(昭和二十五年「研究論集」第二巻第三号)を基にして新たに史料を採り入れ、加筆増訂したものである。

(参考文献)

甘粕継成編 鷹山公偉蹟録、池田成章編著 鷹山公世紀、荳戸太華著 翹楚篇(写本)、細井平洲著 嚶鳴館遺草、佐藤信淵著 経済要録、新渡戸稲造著 武士道、内村鑑三著 代表的日本人、小西重直著 鷹山公と平洲先生、大乗寺良一著 鷹山公と民主精神、三上参次著 白河楽翁公と徳川時代、拙著 上杉鷹山の人間と生涯